

# 「盲ろう者」として自分らしく生きる ～私にとって障害・仕事・支援とは～

中 條 與 子 (Nakajoh Yohko)

## 第6回

### 私の日常④ 対人援助学マガジン

#### 読者の方と文学を通して出会えるようなエッセイを目指して

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

私は、対人援助学マガジンの執筆をはじめて一年九ヶ月の新米者だ。三か月に一度の発行なので、あっという間に次号の締切日がくる。一年を通し

て「盲ろう者」として自分らしく生きるとは何かを考える機会、表現する機会に恵まれている。

第3回(第36号)以降、続きが書けていない。「今」を生きながら、「過去」のことを文学にして向き合うことが、思いのほか難しい。「私の日常」シリーズを連載している。

『「盲ろう者」として自分らしく生きる』とは、題名ではあるが、私の生きることそのものである。自分に向けた文学だけではなく、誰かにひとりでも伝わる表現をしたい。気持ちだけは大きいだけで、書くことができずに、時間だけが過ぎてしまった。

単純な私は、学校に行くことに決めた。昨年10月から文学を学ぶ学校に入学した。

入学開講式で気づいたが、基本は合評形式である。盲ろう者の私は、合評に参加をして、文学を創作するために何かを感じることができののだろうかと不安になった。この学校で学ぶという自分の直観を信じるにあまり、体験入学をしなかったツケである。入学前に知ったところで答えはない。

私はエッセイと詩のクラスに入った。合評は、指揮をとるチューターを中心に囲んで、老若男女、十数名が座る。私はチューターの横に座らせてもらう。

作者が音読して、その後に感想を数名が伝える流れだ。エッセイを書くつもりで入学したが、合評に参加するという事は、作者にもなりながら、詩とエッセイの読者にもなるということである。私は詩の感想を伝えることができるのだろうかと思った。

心配ご無用だった。同じクラスの方が発表する詩とエッセイの作品は、私の知らない世界が描かれていた。

二時間の合評の時間は、私の思い描いた作品の景色が、変化する時間でもある。ひとりひとりの感想と、最後にチューターの感想を聞くと、自分では見えない、気づかない角度から作品を読むことができる。作者の意図とは違う理解の仕方かもしれないけれど、初読でつくりあげた世界がとける瞬間でもあり、とても好きだ。

クラスの人たちの、作者としての文学作品や、読者としての感想を聞くと、その人が生きてきた人生や、その人の周りの人たち、家族や友人などの話が出てくることも少なくなく、生活の息づかいを感じる。その人だからこそ、出てくるような言葉にも出会う。

私が合評に提出するエッセイは、この対人援助学マガジンに書いた内容を、もう一度さかのぼって発表している。

合評をされる機会の時は、チューターやクラスの方に断って、感想や意見をしっかり聴き取りたいと思い、私が席を少しずつ移動する。ひとりひとりの声が聞こえる距離の椅子に転々と座るのだ。作者を目の前に、感想や意見を言うことは、私なら緊張するが、難聴を理解して付き合ってください。感想は様々である。同じ部分に対して、感想が集まることもあるが、ひとりひとり違う感想もある。自分自身では気づくことができないような

視点の言葉や、難しい深い質問をされる事もある。削除した文章を復活させようと思ったり、文章を書きなおしたくなったり、刺激を受ける。とても新鮮で、面白いのだ。

耳と目の障害についてエッセイを書いているので、わたしの障害が伝わる時でもある。

合評後は、二つのグループに分かれる。「飲み会(食事会)行き」と「電車へ直行」グループだ。私はクラスの推定平均年齢より若い平均ぐらいなのに、翌日の仕事を考えて、後者グループになる。

部屋を出て廊下に出ると、いつも暗闇だ。学校が入る建物のルールで、電気は消灯している。エレベータまで、L字型に続くすこし長い廊下を、数人でぞろぞろ歩く。私は両手を使って、数年前に歩行訓練士から教わった、失明した後に活かせるような技術を使って歩く。左の手の平で顔を防御して、右手に持つ杖先を廊下にすべらせる。杖で確かめるポイントは、壁と地面の境界線と、私の一歩先にスライドをさせて、廊下の進行方向と誰かにぶつからないか探る。壁と廊下の境界線がなくなった時、右に九十度に曲がる。そして、弱い光で点燈する光があれば、エレベータの前だ。

私のエッセイで、夜盲のエピソードの合評を終えた日の「廊下」では、こんな事があった。チューターが廊下の電気をさりげなくつけてくれて、私がエレベータ前に到着した頃に、電気を消してくれる。それ以降、誰となく、同じように廊下の電気の点灯と消灯をしてくれるようになった。伝わっていると感じる時で、なんだか照れくさい。

前者グループとの分岐点まで、また、後者グループの人たちとの会話で気づいたが、私自身の相手に抱くイメージの中心となるのが「作品」にあるのだ。相手との会話は、その人を知る糸口になるものだが、会話をすると、その人の奥行が見える気がする。飲み会グループに参加することができたら、クラスの人たちの色々な世界観が見えるような気がするが、時々しか実現できずにいる。

半年学んで、文章の書き方も、伝え方も相変わ

らずわからないままだ。学校で、私はなにを学びとれているかは、よくわからない。ただ、エッセイを書くということに対して、肩の力が少し抜けて、少し向き合えるようになってきた気がする。

またエッセイを書くこと以外に、新たな目標ができた。作品を読んだ感想を、クラスの人たちや、チューターの感想のように、伝えることができる人間になりたい。作品を読むには、理解力や想像力が必要だと思う。幸い本屋で並ぶ遠い作者ではなく、作者の顔を見て、作品に触れることができる。読み重ねて、ひとりひとりに出会っていきたい。他者の作品を読むことができれば、私自身のエッセイも変わっていける気がする。

文学を書くということは、一方通行で孤独に感じていたけれど、顔が見える他者の読者になること、私の作品を他者が読者になるという体験を通じて、一方通行ではないと感じた。

目標がある。読者の方と「『盲ろう者』として自分らしく生きる」の文学を通して出会えるエッセイを書くことだ。対人援助学マガジンのこの場所をお借りして、試行錯誤しながら、積み重ねて書き続けたい。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。